

## 知ることと認めること

森 口 美 都 男

我等はよく云う。「キケロがこう云うた。これプラトンの心持である。これはアリストテレスの語句そのものである」などと。だが我等は、我等みずからは、いつたいどう云うのか、どう判断するのか、またどう行うのか。……(モンテーニュ『隨想錄』一の二五關根秀雄氏譯)

### 一

「認める」ということは如何なることなのであり、それは我々の「知る」ということとどういう關係にあるものなのか。認めることが知ることの一種あるいは一様態であるのか、それとも逆であるのか。それとも知ることと認めるということは、若しかして全く別のことがらなのであろうか。この様な問いは單に語の定義の問題なのであり、恐らくは漢字や日本語の形態に誤られた、客觀性も實質もたぬ問いであつて、殊更に「知る」と「認める」と「知」という二つのものがあるという必要は始めからないことであり、そして恐らくは、どちらかの字を我々の語彙の中から手際よく抹削してしまえば、古くから「知識論」とか「認識論」とか呼ばれてきている西歐の理説の中に既に満足な解明が見出されるものなのか。それともまた、「認める」ということは「知る」とことは異なるという以上に、もともと知とは何も格別の縁はない何ごことかなのであり、恐らくはむしろ西歐の意志論や倫理學で既に扱われた問題なのであつて、二つを一緒に考察すること自身が不適切なのか。——この稿で考えて見たいと思うのは凡そ右の

様な甚だ無限定な問題である。

しかし筆者には、「認める」というこのことは纏まつた一つのこととして、我々の「よく生きること」、そして哲學という學問そのものの中でかなり大切にされてもよい題目なのではないかと思われる。問題は目下の所はたしかに漫然として居よう。何か思いつきに過ぎぬ様な所があるろう。そのことは私自身が認めている。しかも私はそれが漫然たる、取るに足りぬ問題であることを既に知つて、いるわけではない。私にはそうはいえない。だから、少くとも問題にならぬかどうか、を考えようとしているのである。

しかしそれでも、認めることとは、それならば目下の所如何なることと思ひ付かれたのか、一體それが何だといつて、いや何であるらしいといつてそんなことを今さら問題にし、もつと大切にされてもよいなどというのか、明日にも核爆發で死ぬかも知れぬ我々が、今そんなことに暇つぶしをすることは一體許されることなのか、と問われるならば、そして、「認める」とはこういうことなのだ、とツバリ言ひでもするならばともかく、そこに問題がありそうだが、少くとも問題になるかどうかは問題になる、などまどるつこしいことを言つている場合ではない筈だ、と人あつて言われるならば、この追究に答えることは私にはむづかしい。しかしこの追究は逃げることは許されぬ。私はそれを認める。答えることのむづかしい問いは、これを探究する他に取るべき道はない。そしてギリシャの哲學者が教えてくれた様に、「我々にとつて先きなるもの」から始めることを他ににして、凡そ探究なるものを進める順序はない。このことは何びとも認められるであらう。

「水素爆彈は既に、もう落ちてゐる」といつた人があると私は聞いた。この言葉を言つた人も、その事を傳えてくれた人も、ともに私の信賴する思想家であつて、彼らは精神の事がらを何びともまましてよく見、よく知つてゐると私が認めざるをえない方々である。しかもなお、水素爆彈が既に落ちたということには私は半信半疑である。少くとも「どういう意味でなのか」との戸迷いを感じる。その事を事實として、決然として認めることはようしないである。

ところが私にはある。何か残念な思いをしながらこのことを私は認める。むしろ、既に落ちたなどいうことは認め、まい、とする心の動きが私の内に感じられる。しかしこの心の動きのあること自身は、それは何か、「私は認めます」といわねばならぬ様なことなのだ。私はある人たちを一方で心から知者と認めていながら、しかも他方その人の言つたある言葉をば、眞實として認めながらぬのであり、何かただでは濟まして貰えぬ状況、つまり事實の認否を迫られてしかるべき状況の中にあるからである。認める、とは一體如何なることなのか。私はやはり我が身に近いところ、私にとつて先きなるものに端緒をとる他に途を知らない。

水素爆彈の發明を結構な事だ、人智の勝利だ、科學技術の金字塔だという人はまずあるまい、科學萬歳、技術萬歳、核兵器萬歳という人はよもやあるまい。しかし何故そうなのか。我々は何故、水素爆彈を敢て善きものだということが出来ないのか。どうして「知は力なり」といつたフランシス・ベーコンを今こそ頌えないのか。水素爆彈は人類を殲滅するに足る力をもつてゐる。文明の一切を無に歸するに足る力をもつてゐる。もし力は大なるが故に賣からず、といゝうのならば、それなら知も格別責ばれるべきものではないのだろうか。それとも決め手は一に人類の生死に關わるといふべきなのか。しかし人類の死滅や文明の全壞が何故それほど自明的に悪しきことであるのか。そのことは知られてゐるのだろうか。

核兵器による人類の全滅は確かに人類の自殺である。しかし人類の集團自殺が、一も二もなく悪いことだとそう簡単にいえるのだろうか。その根據は何なのか。ストアの賢人と稱せられた人たちは自殺を是認し、その幾人かは自殺の範を垂れもしたではないか。個人の自殺ならばその非なる所以は一般に明瞭でなく、考え方、状況の如何によつては或いは許され、或いは他ならぬ智者によつて讚められさえもし得るのに、自殺企圖の主體が人間の總體になつた時には、

何の反省も見識もない我々の凡眼にも、それは突如として自明的に悪しきものとなり、知れ切つた罪となるのか。

或いは死ぬことをまだ欲していない人が、その意に反して大量に殺されるからそれは悪しきことなのか。それならあらゆる大量死刑も自明的に悪い筈ではないか。しかも、集團犯罪者の集團刑死に類することなら、既に歴史上何度も起つたことであり、刑という以上、ある観點からすればそれは正義なのでなければならぬ。いな、大量殺人者が何らかの名目で義認を求めなかつたことは恐らく一度もないのではないだろうか。聖バルテルミーの日のカトリック教徒による大虐殺にしても、一七九二年九月二日における愛國パリー市民による大虐殺にしても、近くは南京のわが軍人による大虐殺にしても。そしてその場合、その標榜された大義が認められる認められないの争いがいつもあつたのである。何の罪もない者が意に反して殺されることが悪しきことなのだといふべきか。しかし何の罪もない者とは誰のことをいうのか。自ら子供をもつたことのある人は、その可愛げな片コトが唇より出ずるより既に早く、全く無邪氣とは言いえぬことを、そこには自己中心性の萌芽以上のものが見られることを認められるであらう。

我々が欲しないこと、我々の意に反することはすべて悪いことだ、とノッケから言つてしまえばどうだろうか。しかし、我々は甚だ屢々善からぬことを欲する場合こそ多いのではないだろうか。「何びとのであれ、その嗜欲の對象が、何であれ、その善しという所のものである」という意味のことを言い、また「幸福とは一つの對象から今一つの對象への欲望の不斷の進行なのであり、前者の獲得は、ただ後者への途上にすぎぬ」とも言つたのはトーマス・ホッブズだが、果してそうか。むしろ我々は、「我々は欲すべきものを欲し、欲すべからざるものを欲しない」という風でなければならぬ」と、他人に向つては誰でも言うのではないのか。我々の欲するものが、何であれ、欲せられるというその一事の故に善いものであるのなら、どうして核兵器だけがこの全稱命題の妥當領域の外にありうるのか。その權利を認めうる證據は何であるのか。少くとも何びとかにとつては、例えば自己を防禦する爲にそれを必要とする人々にとつては、それはたしかに善きものだとどうしていえないのか。

そこでもう一度、善からぬものを亡ぼしうるものは、少くともその限り、何ほどか善きものとされるが、我々が核兵器によつて亡ぼされるのを欲しないその我々の生命、その我々の文化、その我々の人間が善からぬものでないことは、それほど自明的に、疑問の餘地なく確かなのであろうか。水素爆弾を無條件に自明的に悪しきものとなすとき、我々の主張は、何處にその明證をもつのであろうか。むしろ我々が、テレヴィジョンのお蔭で、シャンソンのレスリングだのスリラーも、だのを居ながらに楽しんでゐるこの今、聲を立てる暇もあらばこそ、怖がる暇もあらばこそ、一瞬の中に死ぬことができるのなら、これほどに結構な安樂死はまたとないのではないのか。——我々が長からんことを欲している我々の生命が正に欲せらるべき生命でありえており、文化が欲せらるべき文化でありえており、また我々の人間なるものが存在すべき存在でありえてゐる場合にのみ、それを亡ぼし來たる力がたしかに悪しきものといわれうるのではないか。しかし、それには辯明が要るであらう。それらのそうありえてゐることを我々は論明し、その資格あるものから權利の承認を得ねばならぬであらう。

一體、我々の生命は何ゆえ、また如何なる根據によつて、尊重されねばならないのであろうか。また我々の人格は何ゆえ、また如何なる根據によつて、尊嚴であるといわれうるのか。ペスト菌も一つの生命であるが、どうしてそれには拒まれる尊さが我々人間には許されうるのか。ペスト菌を全滅する手段が善きものとされながら、人間を全滅する手段が悪しきものである理由は、本當に擧示されることを要しないだらうか。むしろここで一つ自明に近いことは、人間なる種の自己中心性を離れぬ立場からしては、これに十分満足な答辯は絶対に與えられぬということであらう。そして我々が人間の、のではなく、生命一般の尊さを説く場合にも、我々はその理由を示さずに済ましてはならないのではないか。(シュヴァイツァー博士などはこの所をもつと明確に強調して示される必要があるのではないか。)  
「生命の尊さ」などという誰にも正面切つては否定できない言葉が、どんなことでも手柄になり、そう、な事なら、一口乗つておこうという手合によつて、御都合本位に利用されることこそ怖ろしい。幼い吾兒の柔らかい手首を握りしめ、そ

のばら色の頬に限りない切なさを覚える時にも、それがまるであどげなく、天使の様だからと言つて、それでも何ゆえに、生命が尊いものであるかの辯明を、いや「尊い」という言葉が曖昧だ、「記述語」でないといわれるならば、「肯定さるべき」ものであるかの辯明を免除されたとは私には思えないのである。

人間の個人個人、人の生命が、またそれらの生命の全體が、何ゆえに價值あるものであり、人格性なるものが何ゆえに至上に尊い、*würdig*ものとされ得るのかに、認められうる仕方で答えることが出来ないでいる間は、我々が、それらに否定的に働くもの一般を、頭ごなしに悪しきものと決めつけることは少くとも理性的でない。武器一般を非とすることにほど迄も曖昧な所があり、論争が起りうる。この事情は水素爆彈が問題になる場合にも少しも變らない。またこと水素爆彈に關しては、我々が非理性的であつてよいなどいうことは、それこそ最も恐るべきことである。自分が被害者であり、どれ位ヒドい目にあわされたかを喚きたてることは、一般に聞き手にどういふ効果を與えるものか、彼が頑固な自己中心性を一方的に去つて私の訴えを一體聽くものかどうか。その様な目にあわされても仕様のないような所がチヨつとでも私の方にあるならば、少くとも他人は、私の怨みごとなど聽いてくれはしないであらう。それは認めて貰えないであらう。私の仕うちと、私の受けた返報とのバランスには、どこまでも曖昧さが残る。理窟が言える。人は一般に認めない。

我々が兵器の禁止を促進する權利を得る爲には、何よりもまず、我々自身の生命がそれあることによつて始めて尊貴である所以の理由を見誤ることなく確認せねばならぬ。いな、さもない限り、我々には水素爆彈の價値を是非する資格は全く缺けている、ということをも勇らしく容認しなければならぬ。我々の生存が正當に是認されうる途が選ばれねばならぬ。

序ながらまず水素爆彈を一掃して了つた上で、徐ろに、落着いて、自己の存在理由や生命本來の面目をも探究しようなどというのは順序が逆である。そういう前後顛倒された探究は、實際に始められる氣遣いはないのであり、古來

その試しもなかつた。順序が逆である間は、水素爆弾にも十分の存在理由があると思われるのであり、事實存在し續けるであろう。いな、恐らくは今日の核兵器以上、核兵器的なものがこれに取つてかわるかも知れない。水素爆弾の威力の弱さ効率の悪るさを啞わねばならぬ日が遠からず来るかも知れない。實際、今日世界人口の半數近くは「唯物論的共產主義」なるイデオロギーを水素爆弾の存在以上、恐るべきものと見ており、また他の半數近くは、「資本主義」なる權力機構を水素爆弾以上、否定さるべきものと見ていてのではないのか。しかしこの三つのどれも、それとしては、ありうべき最悪のものではあるまい。

我々の現に生きてゐる生命が生きるに價せぬ、ないしは生きられてはならぬ如き生命であると假りにせよ。それを亡ぼすものは許され頌えらるべきではないか。また現在、人類の壓倒的多數は生きるに價せぬ生命を大規模に生きてゐると假りにせよ。かかる生命を大規模に亡ぼす武器こそは、むしろ甚だ善きものといわれなくてはなるまい。これは恐らく、ペスト菌がその存在を拒絶されて然るべき理由以上に良き理由であるだろう。再び言えば、我々の生命は何よりもまず、肯定されるべきもの、他者によつても自らによつても是認され得るものに——我々自らの決意によつて——爲されねばならぬ。我々は自分の心底の事實を事實なりとしてあからさまに認め、自分が事實として既に生きてゐる如き正にその仕方での生命が眞に生きるに價する生命であるかどうか、またそうであつて來たかどうかを、今こそ老いも若きも、男も女も反省して見ねばならぬであろう。この様な反省の得難い機縁となりうるものとしては、水素爆弾の發明は、まことに善きもの、その存在を嘉みせらるべきものでさえあつたと、私は敢ていう。まことに「知は力なり」——しかし私は「知」というよりもむしろ「認」といいたい。

核兵器もその持ち手によつては、また使い手によつては止むをえぬものだ、許すほかはないものだ、などというのは誤謬である。文化科學や社會科學が進歩すれば、どの様な兵器の統御も可能になるなどというのも全くの妄説であり空論である。水素爆弾を用いる權利のある人間は絶対に一人も何時になつても此の世にありはせぬ。その所有を

正當とする理由をもつ國家などというものは絶対に一つもありはせぬ。核兵器は絶対につくられてはならないものであつた。しかもそれが現にあり、現に増えつつあるのは當然なことであり、むしろそれはそうあるほかはないことともいわねばならぬ。そしてその存在が悲しまるべきものである以上に、もつともつと深く悲しまるべきものもまたあるのである。いう迄もない、生きられるに價せぬ自己の生命の存在がそれである。しかも、それがそうと認められようということ、それをそうと認めうる力が私たちに與えられているということには悦びがありうる。智慧は悦びの母なのだ。核兵器は、その破壊力に劣らずまた最強の照明力をも持ち得るものなのだ——如何に盲いた人の眼底にも光を投げうる程の。しかし、それにはまず私たちの決心が要求される。

自分の生命が真によく生きられた、またよく生きられて居る生命と言いうるものであるか否かは、他人の顔色を讀み、その評價をきいて決めねばならぬ様な事柄なのではない。ましてや、世論調査や人気投票で決まることなのではない。多くの人が、特に權威あり権力ありとされる人や集團が、この私の生き方を是認してくれて居るということがたといあつたとしても、それは、それだけでは、私のその生き方が肯定されてよいものである、ことの何らの最後のな證據にもなるものではない。我々の生命は、究極において、我々自身の自證というべきものによるほか肯定される途のないものである。このことはしかし、各人が既に事實上生きている生き方を、自らの嗜好に基づいて強情に肯定しつつつけてよいことなのではない。それは言う迄もないであろう。またその様なことで、人間の内心の不安、「私の全生命は若しや肯定され得ぬもの、全く意味のないものではないのか」との不安が消えてくれるものでもない。そして他人の自己に對する、それも自證せる人ではなく、大衆の自己に對する是認・否認の如何がいくらかでも氣になるということこそは、明かに自分がその様な自證になおなお程遠いということの、恐らくは現在それに背を向けているというそのことの、證據と言つてもよいものであるだろう。

我々は自分たちが核兵器の存在を好まない、怖ろしく思うということが、いな自分は肉親を原子爆弾で失つたとい



うことでさえもが、いない自分が自らその被害者の一人である、ということと、ただそれだけでは、その禁止を訴えるに十分な権利とは決してならぬことを知り、かつ認めねばならない。自らの肉親を既に核爆発によつて失われた私の同國人への憚りは大きい、私はそういわねばならぬと思う。我々には、ただ單純に實驗だの製造だの貯藏だの禁止運動に参加する義務など断じてありはしないのだ。その様な運動の發起とそれへの参加とを少しでも自分の手柄にしたい時、私たちは、それが何故成功せぬのかを考えて見ねばならぬ。

世界世論の力というものは決して弱いものではない。それは非常に強いものである。それは恐らく水素爆弾とその威力を競うに足りよう。しかしそれは決して絶対ではない。我々一人残らずの義務は、むしろ水素爆弾が禁止されてよいもの、禁止されねばならぬもの、一も二もなく悪しきもの、と断言する爲の十分な理由となりうるおのが生命をおのがじし生きえていること、そしてそれが如何なる生き方なのかをまず知る、ことであるのだ。

如何なる生命が是認さるべき生命であり、如何なる生命が否認さるべき生命であるかを我々が本當には知つて居ないのならば、それは探究されねばならぬ。しかし何よりも先ず自分がそれを十分には知らぬことを、しかも知らねばならぬということとをまず認めねばならぬ。その上で始めてそれを知つていと思える人を何とでもして探し出し、その教えを乞い、その人の語つてくれる眞理をそれと認めることも出来るのである。しかし不幸にして、その様な人が見渡した所一人も見當らぬというその時には、自らの無知を認めた人間同志が集まり、互に助け合い、一緒に問題を探究するほかに途はあるまい。眞に「仲間」といわれうるものとは、この様な問いをば是非にも解決せずにはおくまいと決意した人々の共同體をいうのではないか。(今日の大學がそういうものでありえているかどうかなど、問うて見るだけ野暮であろう。) それは眞に知るに値し、眞に知らずには済まし得ぬことを、如何にでもして知らうとする人々の集まりでなくてはなるまい。それは、みずからの無知を不斷に認め、またその認め方の足りぬことをも不斷に認め、どの様な眞實をも認める、決意をした人々によつてだけ維持されうる様な集まりであるであろう。

この様な仲間もまた、核兵器によつて一瞬の中に吹き散らされるかも知れない。いなその様な幸運には恵まれないで、手を失い、足は腐り、病み、傷き、衰えた身體をもつて、互に語り合うことさえもが不自由な中に、一人また一人と仲間を喪いゆきつつ、纏て最後の一人の死に至るまで探究を続けねばならぬのかも知れぬ。後の方の事の起ることは恐らく必至なのである。しかし彼らはそれに耐えることが出来るにちがいない。彼らの集うた目的は、正にその様に如何なる苦難にも耐えてよく生き通すこと、それを求めること、にこそあつたのであるから。それが地球の、太陽系の、銀河系宇宙の、いな壯語を許されるならば、全宇宙さえもの存在理由ともなりうる、とはいわぬ迄も。

## 二

佐藤一齋が次の様にいつてくれている。

「理到るの言は、人服せざるを得ず。然れども、其の言激する所有れば則ち服せず。強うる所あれば則ち服せず。狭む所有れば則ち服せず。便ずる所有れば則ち服せず。凡そ理到つて人服せざれば、君子必ず自ら反りみる。我れ先ず服して、而る後に人之れに服す」(『言志録』一九三〔岩波文庫版五九頁〕)と。

何故この一齋の文章を引用したか。それは誰方にもお分りであろう。前節の私の議論には、大いに激している所があるだけでなく、狭んでいる所、便ずる所、つまり何か恃み誇つている所と、そして *une arrière-pensée* とがあつたからである。私は核兵器にどう對處するかという問題を論じ、それに就いて、黄吻虹を成しながら、それを自分の恐らくは閑葛藤でもあろう問題の正當化に利用しようとしたのだからである。そんなズルいことを他の人がやつていたのならば、私は逆も承知はすまい。だから私の前節の議論も納得されては居るまい。一番悪い場合には、「認めること」を主題として問うことの権利づけが仄めかす程度にすら出来ていないだけでなく、この底意があつた爲にも

つと眞劍な大切な問題についての發言もすつかり毫無しにされてしまつてゐるに違ひない。いや自分の言論を勝手に「理到るの言」に決めてしまつたことも滅茶なのかも知れぬ。しかしながら、私には自分が文を綴る立場を出来るだけ有利にして置きたいという下心はたしかにあつたが、「認めるということ」、このことが一體どういふことなのか、という私の目下の疑問が、私たちの生死に關わる問題と全く無關係だとまでへり下る必要は認めない。ここで引退りたくない。今少し激すること少くして私にも論じられそうな、しかし自分の「よく生きる」と全くは離れてもいなくとも思われる問題からもう一度出直すことは出来ないか。私はこれまでの議論で、既に二度ばかり「自分の手柄にする」とか「手柄願する」とかいう文句を使つた。今度はこれを端緒にして見よう。それは私が書いて得をする見込みの比較的少い論題であると思われるから。

(一) 我々が核兵器禁止運動の様なことをする場合、それは理のあることである以上に殊勝なことなのであるから、右の一齋の言葉は、何人もが深く理解していなければならぬことであると思う。また人間が核兵器なるものを作り出した状況が重大なことは明白なのであり、この人間の状況の本質をしつかり見定めることは哲學者の急務でなくてはならぬ。この點についてはどういふ立場を採られる方も、坂田徳男先生「哲學者の任務」(『人文研究』大阪市大文學會、第九卷、九號所載)を是非ともお読み願いたい。そこには現代の西歐思想の最も新しい全動向が平明簡潔に描出され、その根本原理の上からして的確極まりない評價或いは批評をうけている。(なお筆者は日頃坂田先生の教えをうけている者であり、また先生と同じ學校に職を與えられているものであるから、右の様にいうことは、日本人の神經には障るところがあるかも知れぬ。しかし事が事であるから、そんなことには構つておられぬ。くどいが爲念。)

我々は誰しも權威者によつて認められることを今もなお渴望しているか、あるいは少くとも會つて何程かその様に希つた經驗をもつてゐるであらう。あるいは「世間」によつて、あるいは時の「権力者」によつて、あるいは「批評

家」によつて、あるいは特別のその様な名をもつものではなくとも何らかの力あるもの、頼もしいと思われる者、ことに曉る位と思われる者によつて認められるということが、我々のどれほどの關心事となつてゐるか、あるいは少くとも曾てなつていたかといふことは、我々が自分の生命を受けとるのは恰も他人によつて認められるといふ此の事からなのであるかに思われる程なのである。認められるといふことは、水でもなければパンでもないにも拘らず、それは我々には恰も水やパン以上に、我々の生命にとつて缺くを得ぬものの様に思われ、餘事一切をおいて求められることもまた多いのである。自分を認められていないと見出し、如何にもして認められねばならぬと感じ、さらには既に何人かにより何程か認められてはいても、それを確保する爲には始終何とか手を打つていねば安心できぬと自己を見出す人間の不安と苦惱とは、水やパンの缺乏からするそれに勝るとも劣らないであらう。

孔子様も「人の己れを知らざるを患えず。人を知らざるを患う」(學而篇)と仰せられ、また「人知らずして慍みず、また君子ならずや」(同)とも仰せられた。そして信賴のできる學者によれば、(そしてそれは勿論そうなくてはならぬが)孔子様は終生自ら君子なりと許されたことではないといふことである。

この後の方の「人知らず」といふことは、ただ一通りの浅い意味で「人が自分の功績や力量・技倆を認めてくれぬ」といふだけの意味には盡きず、むしろ少くとも私のなすべきあらゆる種類の心盡しと思ひ遣りところが問題にされているのではあらう。またここに用いられているのは他ならぬ「知」の字であつて——「知」にはミトムの訓みもあるにはあるとして——「認」の字ではないことも見過しには出来ない。(もともと「知」と「know」、「erkennen」とには向きが逆の様な所があるとも思われるがそれは後の問題である。)けれども、今日私たちが「世間が認める」といつてゐる時の含蓄もあつてこの章句が人を教えるのであることも疑われえない。人に認められないで居て、しかも心平かに生死し得ることの至難なことは、聖人といわれる方もまた心に懸けられたことなのである。人に認められること、その意味で人に知られることは、深く我々の心を捉えて離さぬ事柄であるのみならず、また我々がよく生きうる事と

も些かならず聯關していると見られる證據としてよいであらう。

世の落着きな人々とは異なり、自分は世の何人からも認められることを求めない、という人がある。―世間の評判」などいうものは齒牙にも掛けぬという人もあるのであろう。また名聲だの世論の支援だの氣受けたのといったものが、事實「空の空なるもの」であるということ、我々は多くの東西の賢者たちから聞き知つてもいる。モンテ―ニユは「榮光は影の如き」ものである事を描き示してくれた(二の十六、十七其の他)。スピノザはその事を明證必然的な確實さをもつて論證までして見せてくれた(『エチカ』第四部定理五五、五六、五七。但し『知性改善論』の冒頭がよく分かる)。モンテ―ニユやスピノザ自身はたしかに世間の與える認知や賞讃の本質を洞察し、清澄にしてしかも快活な平靜の中に生き得た人なのであろう。

しかし、「自分は世に認められることを求めない」と私などがいつた場合には、「自分は認められ度がつて居ない、というその點に關して私は熱心に認められ度がつて居ると見られるふしのあることを否定できない。「私は落着いていない」ということを私が殊更に言及せねばならぬという場合は、一般に私が落着いていない場合、それも並々ならず落着いていない場合である。言及する mention ということは、一般に言及されたことが見すごしにされまいがために爲されるのである。今の場合の言及は、自らに屬する何ものも強調され目立たせられる必要などはない程に慥かなものであるとされつつ、正にそのことが自分の注意の焦點に落ちたということ、つまり目立つてほしいということを裏切つてしまつたわけであつて、自己の何ものも特記され、明るみへ出されなくてもよいということが、ほかならぬ自己の特記の爲に利用されるのである。この場合には、「認められたがり屋」でないというその事が認められるのを必要としている當の事であることによつて、認められようとする私の關心はむしろ加重されて居るというべきである。人に、また世に認められんとする願望が――何びとにも少くとも氣分的にはいくらか氣づかれています如く――何程か人間にあつての非本來な願望であり、何か我々にそれあることを恥ずべき事柄なのであるとすれば、今の場合にはこ

の非本來性を指摘しただけではもはや効果のうまれない様な、いわば一二次数の高い認知要求があるわけであろう。一般に、豫想される抵抗——その中には他人の忠告もある——の先廻りをして、その手配まで済ませてあるということとは、その要求の強烈さの指標なのであるから、我々が稀ならず、「世評を気にせぬ」と態々言い度くなる様な存在者であるということは、我々にあつての認められることへの關心の根深さと、その射程の長さとを證據だてるものであるだろう。尤も、悟りめかした人、賢者氣取りの嫌味、というものはひとしく次数の高いものであるから、この手段によつては極めて愚かな人々の評判をとることも實際には容易でなく、まず相手にされなくなることの方が落ちななではあるが。その滑稽さによつて救われることが無ければ、この種の人は世の中で最も不愉快な人間に屬するであろう。我々は、人間として、他人に多少とも認められたく思つていて自分の恥ずべき現狀を認めた方がよい。この自認する、というのはもとよりその現狀に胡床をかくということではない。ましてやこの認めることが卒直氣取りになつてはならぬ。しかし自己の現狀を事實通りに認めるということが、人間存在とその力との本質を知つてよく生きる爲に絶対に必要なのである。

人から認められるということが、この様に極めて根の深い我々の關心事であるということ、またそのことが我々のよく生きることに密接な關係を持ち、哲學的に問われるに價する主題であることは一應認めて貰えたとして、また、他から認められることの欲求が我々の配慮のそれ程にも大きな部分を占めていふことが、ほかならぬ我々の存在のある本質的な不慥かさ、ないしはその非・自己充足性——我々が所有しているとされる力量についてであれ、我々が價しているとされる功績についてであれ、あるいは其の他諸々の我々に屬しているとされる、どの様な價值性質についてなのであれ——の指標なのだ、ということも豫想されるとして、かくしてまた、適切に「認められる」とか「認められない」とかいわれるものとは一般に如何なるものがであり、それはまた何故なのか、ということもいくらかは示唆されたとして、この他の人から認められることは、一般にそれ自身もまた一種の非・自己充足性をその本性

としていることをここで注意しておこう。認めるということが本來何の一種であるといわれるべきか、も少し詳しくいえば、それが見ること（直観）、信じること（信憑）、作ること（創造・作爲）、印るすこと（特記）の夫々と、また評價や措定 *Setzung* 一般ともどういう關係にあり、結局どうすることのどういう現象であるかを決めるのにその注意が役立つからである。

私が自分に屬して何らか値ありとされるものに關し、その價值種類について權威ある人の鑑定や印可を受けた場合、この認證は、決してそれだけで私の認められんとする欲求をすべて解消し、私を安靜の中に置いてくれはしない。私は、私が權威者 A によつて認められたというその事を、今度はさらに A 以外の B C D 等々の人々に知つて貰い、認められようとする止み難い要求をもつ。私は自分が認められたことが果して世の知るところとなつていくかどうかを、如何にもして確認し度く思い、時には自分が權威ある主體によつて認められたことを自ら勞を執つて布れて廻らずにはおられないのである。私は、一般に自分がかの高名なる誰に親しく交わられているかを、機會ある毎に、序ながらというそ振りて人々の耳に入れておきたく思う。恐ろしく淺ましいことには、高名な人と私とのある親密な關係を他人が誤つてありとなし、誤つて私に敬意を表する場合にさえ、それを取り消さないでおいたり、それがまことであつてくれたなら、と願つたりさえするのである。我々の自己の價值を他から認められんとする飢渴は殆んど不盡であり、一つの認可はさらに他の認可を、そしてその再認はさらに他の確認を、そしてそのまた再確認をと、何處までも認められることを求めつづけて止むところを知らないのである。また一人の批評家からの好評は他の批評家の裏書きによつて補強されねばならず、一人の權威者の是認も、さらに權威高き權威者の追認なくしては不安なのである。

私の能力なり私の業績なり私の努力なりを認めるところのこの權威者が、たとい何らかの觀點で目下出合われうる最高の者、またはその評判ある者であつたとしても、なお私の不安、「是認と確認とが未だ十分でないのではないか」という執拗な不安は消えないであらう。まず一安心した私は、これまでの認可渴望の爲に狭くなつていた己れの視野

を再びひろげられ、この時、我が目を疑うが如くに、その權威者の權威自身もその印可を得る前に自分が思つていた程に堅固なものではなかつたことを見出すであろう。今度は私自身が彼の權威の安定を如何にもして確立せねばならぬと感じ、彼の權威をより多數の人々が、より深く、より強く、より確かに認める様にと奔走さえし、彼の評判に一喜一憂せねばならぬであろう。彼の「評判の好き」を我が事のように喜び、彼に對する多少でも批評らしい言辭には神經が尖り、それもそれが根も葉もないものではないと感じられる度合いに應じて、一方では聞き耳を立てずには居られず、他方では強く打ち消し度く思わずには居られまい。私は私の是認者たる權威者たちと大衆との間に同盟關係があればよいと思ひ、時には何氣なくその劃策をさえしているかも知れない。「小説の神様」だの、「評論の神様」だのという奇體なものが何時の間にかやう出来上つてしまふのもこゝろ邊りに原因があるのでは違ふか。そしてその時また、自分が是認されたことは一種の選り別けであつたのであつて、従つて同時に他の人が否認されたことと表裏していたこと、また、彼れも貰ひ是れも貰ひという均しなみの是認ならば、もともと嬉しくも何ともないことであつたことに、またその事の重大さにも氣付くであろう。人に認められることには排除性がある。自分を世に出してくれた人と自分が競争關係に立つとか、あるいは彼を裏切る羽目にさえなるとかいう狀況もすぐに氣づかれるが立ち入らぬ。また、「深い流れる浮草が一塊りになり互を支え合う」(ベルグソン)様に、お互いに支え合う權威者集團が發生する理由もよく分るがこれにも立ち入らぬ。ただ prize-winners は我知らず、大なり小なり prize-hunters になつてゐる事の多いことを注意しておこう。「何とか賞」には一般に消滅時効があり prescribable。そのことに人一倍氣を使わないでいられる受賞者というものは餘程の人物であり、また極めて稀である。受賞者なるものに一般に特有の輕躁性が見られるのはこれによる。彼らは「風を吹かしている」からすぐ分かる。もし私が人に「俺様を知らないか」と言いたくなつたら、そのとき私は認められることのもの足りなさを、自分より低いと自ら決めてかかつた人々からさえ認められねばならぬという己れの頼りなさを、自らに證據だてたことになるだろう。



「他人に認められること」<sup>(1)</sup>には、空間的にも時間的にも、一種の消褪性が本質的に屬しているかのようである。そしてその故に、このことへの欲求には一種の増殖性が本質的に屬しているかのようである。

(1) 恐らく私は、男性——仕事をせねばならぬ存在者であればその生理學的構造はどうなつて居つてもよろしいが——にあつての認められたいと思う關心に興味を持ち過ぎてゐるのかも知れない。私は、女性にあつての化粧し、着飾ることへの異常な關心や、流行への信じ難い程の興味や、夫の「歸宅を遅く迄ねもやらず待つて居てあげたのだから」そのことを一こと位は何か言つてくれ mention してもいい」と思う心根や、「折角心を籠めてこしらえたお料理を、馬ぢやあるまいし、たゞムシヤムシヤ喰われたのではせいがない」という不平などを取り上げることができたらう。しかし、その爲には、「結局大きな子供なんだから可愛い所もある」という諦めなどを一緒に考察せねばならぬという面倒がある。第一自分が男であつてみれば心得顔に女性心理を述べてみても見當も外れ易く、禮を失することが多いであらう。尤も、「心遣り」という問題については後に立ち返る機會がある。

### 三

右のような「ある特定の他人ないし集團的主體から私が認められること」に對する私の切實な關心と、しかもそれにとどこまでも附きまとつてゐる非・自己充足性、少くとも私がその事態で満足できないということ、——このことはさしあたり認めることの本質について如何なる事を示唆してゐるであらうか。

まず第一に、認めることは力を與えること、力付けること、勵ますことであり、認められることは何か私が力を得ること、鼓舞されることである、ということが氣づかれる。誰かから私が認められるということに私が極めて高い重要さを與えざるをえないのも、それが私の力を増し加えるものである、或いはそう想定されるものである、からであらう。もしホワイトヘッドの教える様に、ロックの思想が結局力 power なるものを實在と見、それがまた「實體」なる名辭の本來の意味でもあるとした點にあると解釋されうらば、そして、同じホワイトヘッドが彼のいう

現實存在者が實在 reality であることを解明しつつ、プラトンでの *dynameis* と the real との等置を重視している<sup>(1)</sup> ことにも理由があるとすれば、我々が「力を得る」ということはまた、現實的存在者たる我々が「實在性を得、増し加えられる」ことを意味しうるわけであり、かくして認められることによつて、我々はより多く實在する者となるという<sup>(2)</sup>こと、或いは少くともそう思ひなされるということがあつても少しも不思議はない。ホッブスもいふ様に、賞讃するという意味での「認めること」は、何かを「大なるものとすこと」 magnifying を意味し、またそうされた者は magnificent と呼ばれる理由をもつのであろう。

「……を認めること」とは確かに「……に存在を與へること」であるいは少くともそれに類したことがあるらしい。私が自分の名聲や評判によせる關心の如何に熾盛なものであるかということ、明日の御飯が頂けるかどうかという心配の性質と根源的には存外近い關係にあるらしい。それらは、それが手に入らなければ私の在ることが止むものではないかという心配の種として、ともに私の生死に密接な關係あるものなのである。

- (一) A. N. Whitehead: *Adventures of Ideas* 1933, Pt. II, ch. viii *Cosmologies* sec. 1, 2 ㄱ Pt. III, ch. xii *Past, Present, Future* sec. 5. の邊に參照。始めの方の箇所は、 $\gamma\upsilon\mu\alpha\kappa\tau\epsilon\rho\iota\kappa\alpha\iota\tau\epsilon\tau\alpha\iota$  ο  $\alpha\lambda\epsilon\gamma\omega\delta\eta\tau\alpha\kappa\alpha\iota\delta\iota\sigma\tau\alpha\lambda\alpha\sigma\iota\sigma\iota\sigma$  [*ταυα*] *κεκτημένην δὲ βάλου εἶς τὴν τῶν τοιαύτων ἐργῶν πέφυκός εἰς τὴν παθεῖν καὶ σμικρότατον ἐν τῷ φανερῶτάῳ, καὶ εἰ μὴ οὐκ εἶς ἐκείνῃ, καὶ τοῦτο ἔχοντος εἶναι τὴν δύναμιν ἴσῳ* [*ἐπιτέλει*] *τὰ ἔτερα ἄς ἔσται οὐκ ἄλλο τι πᾶσι δυναμῶς;*』』 *ἵνα τὸν Jowett* の英譯 “My suggestion would be, that anything which possesses any sort of power to affect another, or to be affected by another even for a moment, however trifling the cause and however slight and momentary the effect, has real existence; and I hold that the definition of being is simply power.”』』 *なればざるべし*。』』 *ホッブス自身も言う廻り  $\alpha\lambda\iota\epsilon\iota$ 』』 *三條に『 $\gamma\upsilon\mu\alpha\kappa\tau\epsilon\rho\iota\kappa\alpha\iota\tau\epsilon\tau\alpha\iota$ 』なるかぞ知せむ。』』 “...‘being’ is the agent in action, and the recipient of action... ‘action and reaction’ belong to the essence of being...” “...The Aristotelian doctrine, that all agency is confined to actuality, is accepted. So also is the Platonic dictum that the very meaning of existence is ‘to be a factor in agency’, or in other words ‘to make a difference’. Thus, ‘to be something’ is to be discoverable as a factor in the analysis of some actuality.**

……」(2)は F. M. Conford: Plato's Theory of Knowledge の序言第一頁には、恰も今のシヨウエトの英譯によつてホワイトヘッド程の思想家でも如何に大きな取り違ひをしたかということが、一般に單なる翻譯に頼ることの危険の例證にされている。古典學者の云分としては如何にも尤もなことであり、コンフォードの指摘は正當なのでもあるが、この議論の中心、本質がそれで實際どれ位動くものか、real な批判かどうか、今は決めてはいる暇がない。いずれが「プラトンの心持である」にもせよ、プラトンの偉さは、私にとつては私自身がそこからどれだけ實質的に學び得たかで決まることだ。なおコンフォードの譯では次の様になつてゐる。『I suggest that anything real has real being, that is so constituted as to possess any sort of power either to affect anything else or to be affected, in however small a degree, by the most insignificant agent, though it be only once. I am proposing as a mark to distinguish real things, that they are nothing but power.』

人間である限り、如何なる強者も如何なる能者も、自己の支配がそれ自身によつて永遠に持續しうるものとは期待しえまい。人間のもつどの様な實力に對してもそれ以上の實力が考えられる。強者は現在の自己の力が目ざましい成果をあげ得ていけばいるほど、それだけ却つて一日も晏如たることを得ないのではないだろうか。如何なる種類のものであれ、何びとかに屬する力というものは、それ自身としては、常識的にも、増減、盛衰を入れるもの、もと不安定なもの、變化するもの、來りまた去り、萎えうるものと考えられる。人間的なるものは、どこまでも何らかの他者による保證を求めてやまぬものであり、その意味で自足的なものではないのであろう。

一つの力がその屬する主體から去り、行かぬ爲には、何らかの仕方ですれが引き留められることが必要なものであり、その顯著な場合の一つが「認められる」ということであるのではないだろうか。そして凡そ在ることを得る爲に、あるいは留まつて去らぬことを得る爲に、在る者は特に他の何者かの「認める」ということを必要とし、かく「認められること」によつて始めてその亡びることを免れうるのであるとすれば、「認める」ということには、その意味でも存在を能與する力が期待されるのでなければならぬ。

また「認める」ということは、さしあたり肯定意志の發働であり、ある主體の自發的な働きであつて、「……に向

つて「承諾」ということ、そして一般的には「よしとなすこと」、「嘉みすること」であるといえそうに思われる。こうした言葉の示唆するところからしては、それは一種の作爲 making ないし（産出）行爲 doing であり、また表現作用でもあるといつてよいであろう。それは、何か「首肯することによつて他者を在らしめることをうる一つの働き」であるとい應考えられる。ある主體が他の主體に向つて「よしと言ふこと」が立ち入つては如何なることなのであるか、そして如何なることであるが故に、その行爲が凡そ存在能與的でありうるのかは未だ問わないとして、ともかく多少の能力をもつ一人の人間が、何者かからあるいは何びとからの是認を求めてやまぬ場合、彼は自らの力だけでは調達しえぬ存在の贈與を求めているのである。

(1) 認めるということ〈は、もつと一般的にも、(一)あるもの、ある事がらに關して人が肯定すること、「然りということ」Yes-sagen によつてそれを存在を與えること、といいうると思ふ。今の本文の場合とは違つた脈絡で、「人類が生物進化の産物であることを認める」といわれる様な場合でも、それはその様な事態をありとすること、を含意し、その首肯を通して、始めてあることが存立をうる」ということを意味する。またある政治體制を認めるということも、その體制の存在を單に知るのでなく、何程か與えることなのである。認めることは事態についてであれ、事物についてであれ少くともある存在能與の趣きをもつ。それは單なる判断措定（後述）ではない。

だから又(二)この存在を確立し、與える肯定は、いわゆる sanction ではなく、必ず何ものかをその價值に關して肯定することであると見られる。「民主主義體制を認める」という表現は、單にこの體制を事實的にありとすることを意味するだけでなく、むしろあるべきものとすること〈あるべきこと setzen lassen〉よしと言ひこと approve〉を意味するであろう。

實力 might から權威 authority を區別する所以のもの、また私人の恣意から軌範的法を、また既成事實から正義ないしは權利を區別する所以のもの、後者に何か「是認」ということが含まれていることであると思ふ。是認を得た力が即ち權威であると直ちにはいわないにしても、また正義を正義たらしめ、法を法たらしめるものはある主體によるその是認であるとも直ちにはいわないにしても、少くとも何びとにも認められていない正義、認められていない法というものは既に正義たり法たりえていぬものとはいはうである。法は、その妥當の爲には何らかの裁可 sanction (= making sacred)、つまり

知ることと認めること

へ聖なりとなすこと」を必要とする。條約の効力も批准 *ratification* (= *making fixed*) をまつて發生するが、批准と呼ばれるこの「固め」あるいは「定着」も「よしということ」によつてなされるのであり、これも一種の承認と考えられる。人間の魂が死と亡びから救い出され、永遠の生命を保證されるのは義認 *justification* によるといわれる。「義とされること」へ義人なりと認可されること」から。人はその存在を受けとるのである。この様に、極めて多くの認めることの場合に、様々な價值種類に關し、その價值を負にでなく、正に判定することが見られ、認めることは、かくして一般に勝義での評價作用 *Bewertung, estimation* を含むとも考えられる。しかし他方、本文でもいつた様に、認められる事態や對象は、むしろ何處か危ふやな所のあるもの、支えの要るもの、消滅の恐れあるもの、遁走的なもの、否定力の中に置かれたものという趣きをもつて居り、一般に固め定められる必要あるものの一例にすぎないとも考えうる。この面からすれば、認めることがすべての場合に評價作用を中樞的契機とするとは言えなくなつてくる。「事實認定」などの語のあることもこの事情を示す様に思われる。

(三) 「認める」ということは含蓄が評價的肯定と見られる場合に關して、もう一つ注意しておいていいことがある。このことばは、たしかに最もしばしば「高く買う」とか「多くとする」とかの意味で用いられると思うが、ここにあるのは單に評價主體と評價客體との二項關係ではない。後で本文でものべるが評價に關心をもつ主體は、決して評價的判定を下す側の主體ではない。「を認める」という邦語の動詞は、極めて廣く我々の社會生活一般において機能しうるが、多くの場合、それは單に「を許す」という位の意味である。この種の認めることは、最も表層的には「を認可する」、「を承諾する」ということである。例えば「遅刻や缺勤を認める」といわれる如く。それもともかく「よしとすること」ではあるが、この場合には「認められるか否か」はむしろ評價主體ならぬ別の主體の關心事なのである。そしていうまでもなく、缺勤だの遅刻だの様な許され認められる客體は、それ自體に積極的價值あるものではなく、「止むを得ぬ」、「まあ、大目に見ておけ」というたちのものである。また、「人を許す」ということばには本來もつと重い意味があり、これも本文の技倆を認めるといった場合とは異なる。この場合には、「特記する」とか「言及する」とかの趣きは殆んどなく、人倫關係が前景に出てくる。また右の「高く買う」という意味の認める *acknowledge* にも、多くの場合、「……に感謝する」ということである。認めるということは、いわゆる相互主體的な状況にあつてすぐれて充實した意味を與えられる方向をもつと考えるのである。その用語例を拾つて無理に定義の様なことをすれば、「認める」とは、「ある主體にあつて、何ほどか消極的な事物【客體】に對する、しかし、その主體の存在を顧慮してなされた、【他の主體の】何らかの評價にもとづく所の存在能與的肯

定意志の表現」とでもいつて見たらとも思われる。甚だ不手際で申譯ないが、これでも「認めること」の分岐の方向線は一應は見えてとれる。

第二に、認められたり、認められなかつたりする對象は一般には如何なるものがなのか、という問題に關しては、認められることから私の中に生ずる増分が力であるらしいことと同じ確かさでもつて、それはそれ自身、私なる主體の力であると考えられる。私の力なるものが、私自身の存在そのものと全く一つであるか否かはなお問題であるとして、従つてまた、先のホワイトヘッドのプラトン解釋やロック解釋や彼自身の思想に對する私たちの對決もなお未決問題であるとして、しかも私が私自身にあつて他から認められることを心から希求しているそのものとは、私の存在自身とも等しい程にそれ程に、私自身に根源的に屬する所の何ものかである、ということはお出来るであらう。私が認められたく思つているのは、事實、私自身である様でもあり、私の存在を、また「その人ありということ」を、の様でもあり、また私に所屬する何ものか、私の所有する何ものかをの様でもある。そして私に所屬するものとしては、何を措いてもまず、廣く私の德 *virtue* がそれであると言われうであらう。しかも又この德に關しては、それが私に、本來的に、屬するといひ得、また私自身やその存在とも等しい程のものとして、(イ)私の自發性に負うもの、あるいは私がその創り手であり、私がそれに關しては全責任を取らねばならぬとともに、また私がそれを正當に誇ることをしてもよいもの、或いは私自身の自由意志の實現したものが、他から認めらるべき本來的ものとも考えられる。しかも(ロ)實際には、私の身に生れつき備えられて居て、絶えず努力を加えていなくとも何處か安心できる様なもの、もしかして偶發的に出かけたのかも知れぬのではなく、人力に負う一切のものの脆さを免れて居り、しかも自分のうちを探せば何時でも其處に見出されてくれるもの、例えば自分の才能や好ましい氣質などが他人の認める所となつて欲しく思われるものなのでもある。何故かかゝることが起るのかを論理的に説明する義務があらうけれども、それは仲々もつて容易なことではない。ここではさしあたり、私の勳功だとか業績だとかいつたものが、普通、認められると

か認められぬとかいわれるべき本来の對象種類とされ、理由らしいものを指摘するだけで許して貰いたい。

一般に仕事は、勝れて認められるといわれうるものであるのは、一回的な出來事としてではなく、むしろ私のうちなる力の持続的な作用のインデックスとしてであろう。仕事というのは物理的にも、單に變位とか速度變化とかいうものでなく、力と距離との積で定義される。仕事の出來をほめてやることとその根柢に豫想される能性を増加し、energizeする効果を持つべきことは、褒賞なるものに通常期待され一般に認められている——このことが善いことか悪いことかは別に問題にされねばならぬが——ことである。そして仕事は、その都度の我々の自由な自發性と、生得の素質と、經驗を積むことから得られた性狀と、さらに運と、これらすべての相乘効果であると思われる。それは、認められて然るべきものが、本来何であるかが判然とせぬ時にも、認められて最も安全なもの、誤りの恐れ最も少きものと見られるのである。

(1) 「自分が他人から認められること」よりもつと一般的に考える場合にも、認められる必要のあるものは、(1)何處か忘失され易く、色褪せ易く、時効にかかつて消滅する恐れのある、或いは引き留められねば無いも同じことにもなり兼ねぬ様な何ものかであつて、しつかりと固定されることを要求しているものであるとともに、(2)ある主體にとつて、そのあるなしが多少とも由々しいあるもの、つまり、存在の場合や、力線の方向に變化を生じ得るものという趣きをもつ。前者についてはあるバランスや調和や秩序の消失可能性が問題であり、後者については、ある力や働きの方向維持の必要性とでもいえるものが問題であろう。「定める」(認定)は秩序の樹立であり、「往かせる」(承認)は方向の許諾である。

第三に認める主體は本来それが如何なる存在者であるがゆゑに認めることをなしうるのか、という問題については、(1)我々の認められたいと熱望するのが、權威者や公衆や達識の人からのそれであることからして、それは自ら多量の力を内蔵している者なのでなくてはならぬことはまず明かであり、恐らくより多く存在して居るといへばいえる様な主體でもなくてはなるまい。(2)また、それが自分に對して「君は仲々」とか「君の何は仲々……」とか原理上は語り掛ける様な他者でなくてはならぬことも多言を要しまい。

しかし、有力な誰かが全く誰にも洩らさず、全く秘かに私を認めてくれているという場合、それは私が認められたことになつてゐるのだろうか。その是認は私自身の耳に届くまでは何の効果も齎らして居らず、私の力をも存在をも少しも増し加え得ないのではないだろうか。誰からも相手にして貰えなかつた私は、此の有力な人が「善し」というのを自ら聞いた刹那、或いは「お前の事をあの方が善しと云つて居られた」と第三者から聞いた刹那、私は始めて蘇生の思いもし、飛び立つ程——ではなくともかくも何程か——の力の漲るのを感じ得るのではないか。だから私自身が何かを認め得ねばならぬのである。私は自分が認められているかどうかを私自ら確認せねば止み得ない、と前に云われたが、感謝というものは一般にその表明を缺き得ないものなのであり、AのBに對する感謝には、Aの感謝がそれとBに知られた時、はじめて充實して感謝になるという所がある。他者の是認と、この是認の私による確認とは全く別個のことなかも知れず、少くとも認めることの別の側面といわれねばなるまい。そこを明かにする爲には、次節以下で考えるように、ちからに對するすがた・かたの、また働くことに對する見えることの意義を回復して來なければならぬ。また「向き」に對する「調和」の意義をも困難ながら考えねばなるまい。しかしここでも、他者が私を認めてくれることの完成には、私の方でもそれを何らかの仕方を知りうる事が一枚加わらねばならぬということだけはいえる。「餘り大げさにするのも却つて不躰かと思ひ心の中で感謝している」とか、「本人の爲にいわずにはいるが、内心舌を巻いている」とかいう認め方は確かにある。しかし、この様な状況自身の含意していることは、認めることが本來何かその印しを現わすべきものであり、いずれば、感謝される側、認められる側によつてそれと氣づかれ noticed、受けとられ accepted、悦ばれること appreciated がなくてはならぬということであろう。感謝された人は“Don't mention it!”と答えるのである。感謝とは、何か mention すること、それを誣うこと、それありと知らずことを含んでゐるのである。

一般に寵愛というものは、その愛を受ける者がその愛を深く感じ知つた時、特に、今までそれと氣づけないで居た



愛をそれを感じつけた時、始めてその効力をあらわして来るものであつて、我々がある主體からの愛に盲目である間は、愛は愛であるのに、しかもそれはなお愛とされきらないでいるという事情があると思われる。そして愛が眞に愛であるのは、それが實に「愛とは何であるか」を知らせ、気づかせるその力自身をも含む様な場合であるのではないだろうか。しかも、このことをそうと認め得るものは、最後は矢張り愛を受け、者自身でなくてはならぬであらう。<sup>(1)</sup>

(一) 前の二段の間で、私は大きな飛躍を冒している。是認と寵愛との類縁性は気づかれるにしても、「認めることは愛する」との一種である」などと、決して軽々しく云つてはならないからである。この命題を眞であると決しうる資格ある者は、その完全に客観的な、かつ必然的・普遍的な證明をなしうる者のみであり、我々はたゞ、ある限定された意味において、それは眞と信ずる他ないのではないかどうか、を厳密に細心に探究せねばならないのである。しかし他人から認められることに附纏う、かの非・自己充足性の中に、何時も私自身による確認の必要性が捲き込まれているというこのことは、認めることの主體が單に力有る他者のみではあることが出来ぬということ、むしろ力無き私自身なる知る主體こそが何か畫龍點睛に類した仕方であること、従つてまたある種の愛に本質的にも類縁的であることを示唆するものではあるだろう。

(二) もう一點。右の非・自己充足性の今一つの面として、如何に高き權威ある個人も、集團も、私の是認渴望を最後の・究極的に安んじうる主體ではない、ということがあつた。しかもこのことは、前段に述べた私による確認が高度のものである場合に餘計さうであるという事情が気づかれる。手許には「何とか賞」の賞状が保管してあるし、授賞者は全世界に知れ亘つたまま最高といえるものであつて何の隠れる所もない筈でもあるのに、しかもそれは「下手な授賞をして値打ちを下げないでくれ」といい度くもなるう様な頼りなさを否定できぬのではないか。認め手がまず有力な他の主體である事は一旦殆んど自明と見えた(本項(イ))のに、そして自己が認める主體として一枚加わらねばならぬらしい事も既に考慮済みである(本項(ウ))のに、しかもどの他人もどの集團も安心なものではない様に見える。そこでこの私がどうしてもそれから認めて貰わねばならぬ主體とは、恐らく全人類なのではないだろうか。しかしまたそれこそは何よりも可笑しいこととは思われぬか、——功勞多き幾多のノーベル賞受賞者たちの努力の成果、核

兵器の出現によつて、今や全滅寸前にあると見える全人類が安心してきそうな唯一の私の是認者だということ。全人類が無に歸した場合、私たちの榮譽を記憶してくれるものは一體誰であるのか。

「否、かかることがあつてはならぬが故に、その故に、核兵器の禁止が即刻實現されねばならぬのだ」という人は多分ないであろう。如何に厚顔なる人と雖も、自分が認められうるということが凡そ持續し得んが爲に、そして自分の安心な認め手が居なくてはならぬ都合上、私は核兵器の禁止を叫んでいるのだ、と言う程までに厚顔であることは控えるであろうから。しかし、我々が、その是認要求の實相を徹底してつきつめてゆけば、我々は事實、その様に厚顔であるのではないだろうか。

#### 四

動物にも感覺はあり、知覺もあろうが、彼らには眞理なるものは無縁であろう。いかに高等な猿類もそれがサルである限り、眞理を探究するなどということは考えられぬ。眞理に與るのはひとり人間のみである。しかも、眞理は我々人間にあつては、ただ單純に知られるとだけ、また見られるとだけいえるものなのではないかと思ふ。

我々が日本語で「眞實」と呼んでいるものは、ただ知られるとだけということの出來ぬ何ものである。我々人間が眞實に對する固有な關係は、何よりもそれを認める、ということではないだろうか。そして眞理が人間に知られるという場合にも、それは勝義において認められるという特殊な知り方によつてなのではないだろうか。實在が實在として、事實が事實としてありのままに知られるのは、我々の場合決して無抵抗にはない。

眞に具體的に事實といふものは、我々がそれを知るのを待つて、いる様な所のある事態のことである。こういうことばを使つてよければ、我々が悪因縁の擊縛を解かれるということがあつて、そこに始めて確立される事實が勝義の事實である。だから事實は單にあるものではないだけでなく、單に見られるものでもない。それは單にプロトコル

というだけのものでもない。強いていえば、知らるべきものが事實なのである。しかし、この様な仕方では勝義で事實を知るというのは、正に我々がそれを眞實として認めるといふことによつてなのではないか。ここには、我々が抵抗に自ら克つことによつて、という事情が含まれている。少くとも、執拗極まりなく絡んでくるイドーラの歪曲効果——それは體驗の中で血眼になつてゐる限り、如何なる主體も免れ得ない——とでもいうものに對して決然たる態度をとるといふ所があるであらう。「人間悟性は、それが一たびある意見を（世に受け入れられた見解であるとしてであれ、自分にとつて都合なものであるとしてであれ）採用すると、何でもかでもそれを支持し、またそれと一致する様に引き寄せるものなのだ」（ベーコン『ノーヴム・オルガヌム』一・四六）。「知は力なり」といふことばも、我々は安易な解し方をしてはならないであらう。

同じことはあれ程に實驗の意義を強調したクロード・ベルナルもしつこい程繰り返していつてゐる。そして彼は、「理性が事實を承認する」のであり、「事實はそれ自身何物でもない」（『實驗醫學序説』三浦岱榮氏譯（創立文庫上・八六一七頁））とまでいふのである。彼は「人は本來すべて……傲慢である」ともいふ。

事實はどこまでも客觀的なものでなくてはならぬが、それは、我々個人の、また人間の恣意によつて曲げられていぬ、という意味である。若し血眼になつてゐる我々が、何ほどかは常に恣意や嗜癖の力の中に捉えられてゐるのであるならば、客觀的事實は何ほどか心ならずも、つまり私の傾向性に反して知られるの他はなく、それでむしろ當然なのではないか。客觀的事實の認識には意志が要る。「私たちは自由意志をもつており、それが、私たちが謬らないよう自ら禁ずることを得させてくれるのである」（デカルト『哲學原理』第一部六、傍點筆者）。

私が「ある眞實を認める」といふ時、たしかに私は「一つの眞理を知る」のである。しかし、「眞實を認める」と私が特に言うのは、「私は捨て難い何ものかを切り捨てた」と自らに言いつゝる場合なのである。眞理を知るといふときには、もとより事實に一致した見解を獲得するために僞なる見解が捨てられるわけであるが、右に捨て難いものと

いつたのは單純にこの偽なる見解のことなのではあるまい。ある見解は、それが眞ではなくて偽であるからして捨て難いなどというのではない。私が「眞實を認める」時に私が捨てねばならないのは、いうまでもなく愛着された見解である。我々が何か愛着あるものを捨てることは決斷といわれる。「人間の感情によつて濡れた眼を決してもたない」爲には、決斷が要る。學者らしい學者は異口同音にこのことを強調している。「そんなことは言う迄もない」といつてはならない。それが認めまいとする態度なのだからである。

(未完)

(筆者 大阪市立大學文學部「哲學」助教授)

前 號 目 次

- 存在論的證明…… チャールズ・ハーツホーン  
 ——まだ論破されていない四つの形式—— 野田又夫譯
- 時と永遠…… 武藤 一雄  
 ——聖書的時間論についての一考察——
- カントにおける「直観」に 観山雪陽  
 ついて…… 有賀 織太郎
- 第九回國際宗教學宗教史會議について…… 有賀 織太郎
- 報 載  
 新着外國雜誌所載論文一覽

次 號 論 文 發 告

- 思惟の根本命題…… マルティン・ハイデッガー  
 ——竹市明弘譯——
- フエヒネル的法則について…… 神崎 祐一
- バークリの夢…… 橋本 峰雄  
 ——フエノメナリズムと形而上學——

知ることと認めること